

第 3 部

動 物

1 章 ルシャ川・テッパンベツ川流域哺乳類調査

1. 調査地と調査法

①小哺乳類捕獲調査

プラスチック製はじきワナを用いて、主にノネズミ類を捕獲して生息種・生息密度を調査した。調査は2ヶ所でおこない、1ヶ所にワナを30個ずつ設置した。

②哺乳類痕跡調査

一帯を踏査し、足跡、食痕などの動物痕跡の発見につとめた。

③哺乳類ライトセンサス

11月調査時、夕暮れ～夜間にかけて、林道を車で低速で走りながら道路両側をスポットライトで照らし、動物の発見につとめた。

発見された動物の位置、数、雌雄年齢などを記録する。動物の目はスポットライトで照らされると鋭く光るため、遠方の動物も発見できる。哺乳類は夜行性のものが多いため、昼間は正確なセンサスができない。開放的な環境に夜間出てくる、エゾシカ、キタキツネなどに有効である。

④調査地

海岸林道（小哺乳類捕獲調査）

ルシャ川・テッパンベツ川河口の平坦地を調査対象とした。海岸の平坦地に沿って林道があるので、それを調査ルートとして利用した。

小哺乳類捕獲調査はルシャ川～ポンベツ川の間にワナを設置した。

植生は、ルートの海側はハマナス、ススキ、ササ等の灌木林・草原、山側はイタヤ、ケヤマハンノキ、ミズナラ、ヤナギ等の森林であった。

テッパンベツ川右岸林道（小哺乳類捕獲調査）

小哺乳類捕獲調査では、林道終点付近にワナを設置した。

植生はケヤマハンノキを主とする河畔林で、一部にササ等の草原を含む。

⑤調査月日

小哺乳類調査は、1995年、11月18日にワナを設置し、19日に回収した（1夜のみ）。

2. 結 果

2-1. 小哺乳類捕獲調査結果

ネズミ類

近藤（1988、文献60）によれば、知床では6種類のネズミ類が記録されている。そのうち今回捕獲されなかったのは、カラフトアカネズミとドブネズミである。

カラフトアカネズミは、半島基部の、原生花園に隣接する森林帯で記録されているのみである。知床においては、そのような局地的な分布を示す種である。

ドブネズミは、通常は原生的な環境内には生息しない。知床では、知床横断道を開通後に、道路沿いに入した例が知られている。車から捨てられる生ゴミ、飯場や駐車場施設など冬場の餌を確保できる場所を中心に生息すると考えられている。

これらの特殊な環境に生息するものをのぞくと、知床に普通に見られる種はいずれも当調査地で記録された。

小哺乳類捕獲調査結果（11月19日）

No	種名	海岸林道	テッパンベツ	合計
	エゾヤチネズミ	1	2	3
	ミカドネズミ	2	3	5
	アカネズミ	3	2	5
	ヒメネズミ	2	1	3
	合計	8	8	16

生息密度

捕獲が1日のみであり、捕獲数が少なかったため、ネズミ類の生息状況について詳細に検討することはできない。

100TNあたり（100個のワナを1日かけたとした場合の捕獲数）に換算すると、今回の捕獲数は、以下のようになる。

エゾヤチネズミ	5
ミカドネズミ	8.3
エゾアカネズミ	8.3
ヒメネズミ	5

ネズミ類は自然状態で、大きな生息密度の変動を繰り返すことが知られている。

近藤によれば、知床の広葉樹林でのエゾヤチネズミの捕獲数は100TNあたり0.00～9.74、エゾアカネズミ3.40～31.97、ヒメネズミ0.00～11.90、ミカドネズミ0.00～11.56であった。横断道路沿いの調査での高密度の年の捕獲数は、エゾアカネズミ35.00、エゾヤチネズミ36.67に達するから、今回の捕獲数は、特に多くはないといえる。道林務部の発表では1995年の10月の調査では、道東を中心にエゾヤチネズミの大発生としている（北海道新聞11月14日付）。しかし、当調査地では、特に大発生の傾向は見られなかった。

植生との関連

今回の調査地の環境は以下のものであった。

海岸林道

海側はハマナス、ススキ、ササ等の草原、山側はイタヤ、ケヤマハンノキ、ミズナラ等の広葉樹林。

テッパンベツ川右岸林道

ケヤマハンノキを種とする河畔林（広葉樹林）。

捕獲数が少なく、両調査地間の差異は明らかではない。

近藤によれば、広葉樹林ではエゾアカネズミとエゾヤチネズミが優勢である。今回の調査では、広葉樹林の調査地であるテッパンベツで、両種は2頭ずつ捕獲された（優占度25%）。しかし、最も多かったのはミカドネズミであった（3頭、37.5%）。近藤によれば、広葉樹林でミカドネズミが優占するのは、比較的トドマツ・エゾマツが混交し、林床が地衣類に覆われた箇所であるとされる。テッパンベツの調査地は、河畔林であるが、山側に針葉樹林を隣接する場所であるため、針葉樹林で優勢なミカドネズミが進入しているものと考えられる。

海岸林道の調査地は、開けた広葉樹林と草原が隣接する場所であった。このような環境では、アカネズミ、エゾヤチネズミが優勢であるのが一般的な傾向である。しかし、海岸部に狭い幅で帯状に見られる環境であるため、隣接する森林からの分散個体の影響を受けやすい点は、近藤も指摘している。今回の調査でも、森林性のヒメネズミが2個体捕獲されたが、これは、そのような分散の影響であると考えられる。

ルシャ・テッパンベツ流域においても、近藤が示した、植生（森林帯）とそこに生息するネズミ類の関係（既存文献調査参照）は同様に見られる傾向であると考えられる。

エゾシカ

ルシャ川河口北方の番屋（林道終点）～ポンベツ川南方の海岸平坦部の終点、およびテッパンベツ川、ルシャ川に沿った林道を踏査し、エゾシカの目撃と痕跡の発見をおこなった。

また、上記ルートを11月8日にライトセンサスをおこない、エゾシカのカウントをおこなった。

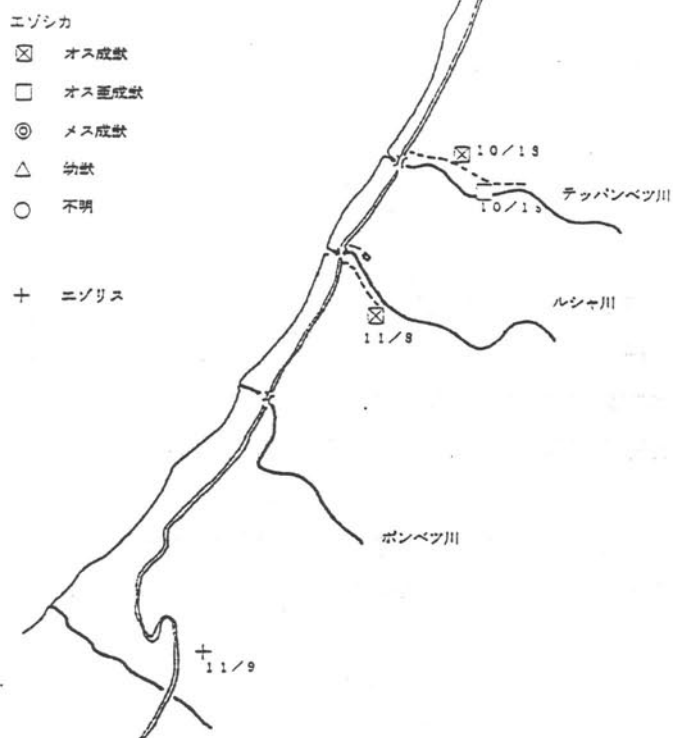
生息密度

エゾシカは日中から林道沿いで観察され、高密度に生息することが示唆された。（図 ほ乳-1）

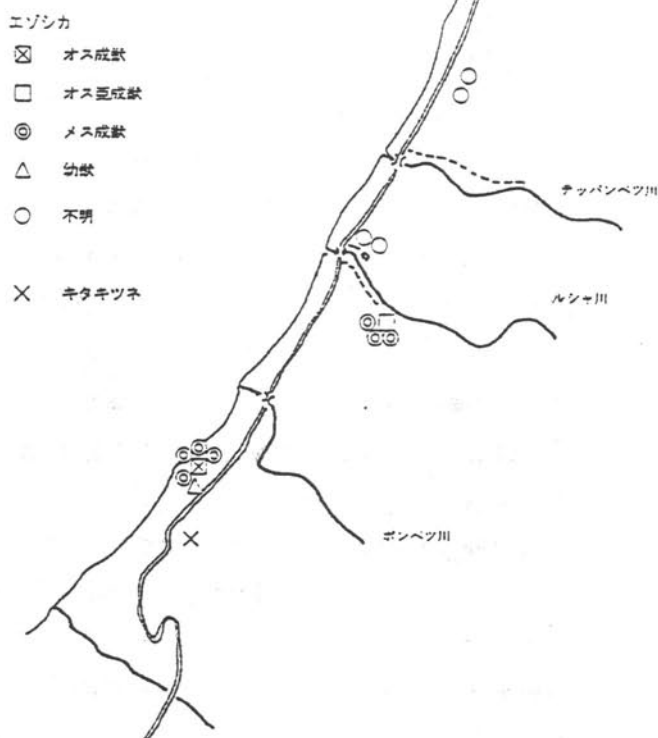
ライトセンサスの結果では以下の群が記録された（走行距離4.1km）。（図 ほ乳-2）

群No.	構成
①	不明×2
②	不明×2
③	オス亜成獣×1 + メス成獣×3
④	オス成獣×1 + メス成獣×4 + 幼獣×1
合計 14頭	

図に乳-1 哺乳類目撃地点
(ライトセンサス以外)



図に乳-2
ライトセンサス哺乳類発見場所
11/8



知床での過去のライトセンサス結果と比較すると、走行距離100kmあたりに換算した発見密度で、森林内で16頭、草地で72-78頭という結果がある(梶 1985、文献8)。この調査では30-40kmを調査しているのに対し今回はその10分の1程度と調査距離が非常に短いこと、近年知床でのエゾシカ生息密度の増加が見られることなどから、直接の比較はできない。しかし今回の調査結果を100kmあたりに換算すると341.5頭/100kmとなり、当調査地の生息密度はかなり高密度であるといえる。

繁殖行動

調査は10月18日、11月8-9日におこなったが、この時期はエゾシカの交尾期に当たっている。調査地までの沿線で、特徴のあるエゾシカのラッティングコール(繁殖期にオスの出す声)を聞くことができた。

ライトセンサスで、オスと、複数のメスを含む群が見られた(群No③、④)(群③はこの群と同一場所で直前までオス成獣もずっと観察されていたため、オス成獣も含まれていた可能性が高い)。

エゾシカは、交尾期にはオスが開けた場所に出てきてそこを他のオスから防衛し、繁殖期独特の声で鳴いて複数のメスを集めて交尾のためのハレムを形成する場合があるとされる(この行動は環境により変化することがある)。群③、④はこのハレムであった可能性が高い。群③はルシャ川河川敷、群④は海岸草原で見られたが、このような平坦で開けた場所が、エゾシカの交尾のために重要な場所となっていると考えられる。

食痕

ルシャ川河口敷、テッパンベツ川河口敷で、ハルニレ、オヒョウ、ノリウツギ、ハウチワカエデ、イタヤカエデの樹皮をエゾシカが食べた跡が発見された。

エゾシカは主に冬期間、樹皮を食べる。この傾向は、特に生息密度が高くなるほど多く見られ、樹皮の食痕は生息密度の指標となる可能性があると考えられる。

当調査地で見られた樹皮食痕の密度は、著しく高いとはいえない。イタヤカエデ小径木（胸高直径 30 mm 程度）には枯死しているものもあったが、それ以上の大径木における枯死は、見られなかった。このことから、ルシャ・テッパンベツ河口における冬期の生息密度はそれほど高くはないと考えられる。

なお、ミヤマハンノキには、角とぎの跡が非常に多く見られた。角とぎは、角の枯角化（かれづのか）が完了する晩夏から秋にかけて多くおこなわれると考えられる。

以上のことから、ルシャ・テッパンベツ河口平坦地は、非積雪期の生息地として重要な場所であると考えられる。

ヒグマ

調査をおこなった 1995 年秋には、ルシャ・テッパンベツ河口周辺で頻繁にヒグマの目撃がされ、新聞・テレビなどでの報道もしばしばおこなわれた。しかし、現地調査では、ヒグマの目撃はできなかった。

痕跡

ポンベツ川河口南側から、テッパンベツ川河口北の林道終点に至る海岸平坦部、テッパンベツ川およびルシャ川沿いを踏査し、ヒグマの痕跡の発見につとめた。

その結果、以下のような痕跡が発見された。

（食痕）

- ① 10 月 18 日、テッパンベツ川の河口より 0.8 km 上流で、ヒグマのものと思われるカラトマス食痕、5 尾分を確認。
- ② 11 月 8 日、ルシャ川河口で、ヒグマのものと思われるカラフトマス食痕 2 尾分を確認。

（フン）

- ① 10 月 18 日、テッパンベツ川河口より約 700 m 上流の右岸林道上でフン。内容はサルナシ果実。
- ② 11 月 8 日、テッパンベツ川河口より約 600 m 上流の右岸林道上でフン。内容はキハダ果実。

このことから、この時期、ヒグマはさけますとともに、果実を餌の一部としていることが確認された。また、今回発見されたキハダを内容とするフンは、珍しい例である。

道内ほとんどの地域において、人間活動によってヒグマが海岸～平野部から駆逐されている現在、知床は海岸から山岳部に至る連続した環境でヒグマ本来の生活が営まれている唯一の地域といえる。

中でもルシャ地域は今回の調査によって確認されたように、ヒグマによる鮭鱒類の捕食がしばしばおこなわれている。本来、ヒグマの秋の食物資源として、遡上するサケマス類は果実類と並んで重要であった(1988 山中他、文献65)。しかし、現状では道内でヒグマがサケマス類を捕食している河川は知床以外ではほとんど見られない。知床でも、シロザケの自然産卵による再生産が確認されているのはルシャ地域のテッパンベツ川とボンベツ川のみである(1988 小宮山、文献60)。このようなヒグマの本来の食性・環境利用を保存した個体群を残すことは、ヒグマの保護にとって大変重要であると考えられる。ルシャ川では、過去に低ダム群への魚道の設置とその効果の検証がおこなわれているが(高橋他1986、文献12・13)、現状については明らかではない。このような試みを継続し、サケマスの遡上の確保をおこなうことも重要である。

今回糞(サルナシ、キハダ)が発見されたように、果実類はヒグマの秋の食物資源として重要である。山中他は特にミズナラの重要性を指摘している。ルシャ地域では、ルシャ川・テッパンベツ川流域の針広混交林がその供給源となっていると考えられる。今回は林内へ深く立ち入った調査は実施しなかったが、この地域の森林は1950-60年代の伐採により林相は貧弱であるとされる。森林の保護をはかることは、ヒグマの餌資源の確保にとっても重要である。

2-2. その他の哺乳類

キタキツネ

ライトセンサス調査において、11月8日、ルシャ川河口～ボンベツ川河口間の海岸平坦部で記録された。調査回数が少ないため生息密度等については明らかではない。10、11月の延べ3日間の調査において、目撃はこのライトセンサスの際の1回のみであり、フン等の発見も少なかったため、密度は高くない印象である。

調査距離が短かったため、正確な密度推定はできないが、試みに密度を算出してみる。調査距離4.1km、有効観察幅40mとすると、密度は0.86/平方kmとなる。米田(1981・文献31)の知床でのライトセンサス調査の結果によれば、森林での密度は1.10/平方kmであった。当調査対象地でのキツネの密度は、米田が調査をおこなった半島基部～半島中央部よりやや低いことになる。

米田、および近藤(1988・文献60)によれば、キタキツネは林地より農耕地周辺や海岸沿いの開けた環境をより多く利用するとされる。知床半島全体から見れば、半島中部以先の地域はキタキツネの生息密度は低いと考えられる。この点はルシャ地域についても同様であると考えられる。

エゾリス

11月8日、ボンベツ川南側の林道上で目撃された。

既存文献から、エゾリスが樹上性であり、オニグルミ、ミズナラ、トドマツなどの種子を利用するため低山帯に分布が集中するとされる。ルシャ地域の低山帯にも普通に生息するものと考えられる。